

「ありたい未来」の姿を描く生活科の授業構成に関する一考察

—小学校第2学年「未来の自分日記を書こう」の単元開発を例に—

A Case Study on Lesson Design of Living Environment Studies to Envision the Future of Hope

Example of the Unit for Second Graders on “Write Your Future Self Diary”

澁谷 友和

Tomokazu SHIBUTANI

要旨 (Abstract)

本稿では、近年の心理学の研究において「未来を想像する能力は3歳から5歳の間に重要な発達を遂げるが、この時期を超えても、子どもが未来を想像する際の鮮明さと豊かさは向上し続ける」という報告がされていることに依拠し、筆者がこれまで取り組んできた社会科における未来洞察型の授業研究を整理し、未来へのアプローチ方法と時間のスケールを視点に、未来思考を組み込んだ生活科の内容構成例を提案した。

その上で、第2学年単元「未来の自分日記を書こう」を例に、「こうありたい」という創造的な考え方で未来をデザインする未来洞察の考え方にもとづき、学習の最後に「未来の自分日記」を書く場面を設定した単元モデルを示した。こんな自分になりたいということを創造的に考えさせ、それが実現し、未来の自分が活躍している様子や、幸福に生活している一日を創造的な日記として表現し、発表することを通して、自分たちの未来は希望に満ちていることに気づき、未来に自信と期待を持つことで、自己肯定感を高める単元計画を提案することができた。

キーワード：生活科、未来思考、ありたい未来、自分の成長

I. 問題の所在

VUCA (Volatility, Uncertainty, Complexity, Ambiguity) の時代を迎え、予測不可能な時代と呼ばれる現在、「未来を考える」活動が増えてきており、注目を集めている。例えば、仮想将来世代の立場に立ち、その意思を計画に反映させる「フューチャー・デザイン」(西條 2021) の仕組みを行政に取り入れたり、非線形的な未来変化をとらえ、その未来像達成に向けてバックキャスト的に取り組みを進めたりしている企業もある。いずれの取り組みにおいても、「未来はこうあるべき」という議論ではなく、「未来はこうありたい」という創造的な考え方で未来をデザインする取り組みが進んでいる。大学においても、東京大学未来ビジョン研究センターや東京工業大学未来 DESING 機構 (以下: DLab) などが設置され、未来に向けての研究が進んでいる。例えば、DLab においては「人々が望む未来社会とは何かを社会の一員として考え、予測可能な未来と異なる 30~50 年先のありたい未来をシナリオとして描き」、その実現をめざして社会との連携を深めている¹⁾。

1) 筆者が 2023 年 3 月 24 日に行った東京工業大学副学長・未来社会 DESING 機構長である佐藤勲氏への聞き取り調査での話である。

一方、学校教育の段階でも、ありがたい未来を描く授業実践が提案されてきている。これまで筆者は、特に社会科を中心に実践が進められてきた「未来はこうなる」という予測できる未来をとらえる未来予測型の授業内容を検討し、「未来はこうありたい」という「ありがたい未来」を描く未来洞察の考え方を援用した「未来シナリオ」作成型の授業を提案してきた。例えば、澁谷（2020）では、第4学年社会科単元「わたしたちのくらしと水道水」を例に、水道水の供給や処理、地域により水道料金が異なる要因をもとに予測した起こる確率の高い未来をふまえて、それとは逆の起こる確率は低い希望のある未来シナリオを描くことを目標とする授業構成を提案している。また、澁谷（2021）では、第3学年社会科小単元「店ではたらく人びとの仕事」を例に、消費者の願いと販売の仕事、売り上げの関係性を学び、新たな問題として買い物弱者について考えた上で、未来の販売の仕事についての未来シナリオを作成し、価値判断・意思決定を行う授業構成を提案している。

このような未来思考やプランニングの発達に関して、これまでの心理学の研究では「未来を想像する能力は3歳から5歳の間に重要な発達を遂げる」ことが明らかにされていたが、現在の研究では「この時期を超えても、子どもが未来を想像する際の鮮明さと豊かさは向上し続ける」ことが報告されている（Atance 2020）。この報告から考えると、これまで筆者は、第3学年から第6学年（8歳～12歳）が学習する社会科において、子どもたちの未来をデザインする資質・能力を育成する授業開発・実践を行ってきたが、6歳および7歳の時期、いわゆる小学校第1学年、第2学年に対する未来を考える授業に関しても、そのあり方を考える必要があるだろう。第1学年から第6学年それぞれの学年において未来をデザインする授業を展開することで、子どもたちの未来をデザインする力の向上の連続性が確保されることになり、「ありがたい未来の姿の鮮明さと豊かさが向上し続けること」につながる。

従って、本稿では、これまで筆者が研究を進めてきた社会科との連続性をふまえ、第1学年および第2学年の教科である生活科に着目し、第2学年における単元開発の一事例を提案する。

II. 未来思考を組み込んだ生活科の授業デザイン

1. 未来へアプローチする方法の変化（社会科を例に）

これまで社会科で実践されてきたのは、過去や現在の様子から直線的な延長で演繹的に未来にアプローチする未来予測型の授業である。「未来はこうなる」という予測可能な未来を取り上げ、その未来に対して「どうすればよいのか。」「AもしくはBのどちらを選択するのがよいのか。」等の問いで子どもたちに価値判断・意思決定させるものである。このような授業実践が重視されてきたのは、「事実の分析結果、法則性、未来予測を踏まえれば、社会科で育成すべき市民的資質の中核である合理的意思決定ができる」力を育成することができるからであろう（岩田 2001）。例えば、吉元（2008）は鹿児島市のごみ処理問題を取り上げ、鹿児島市とドイツのごみ処理の特徴を学習し、最後には「今後のごみ処理ではどちらを取るべきだろうか。」という意思決定をさせている。

しかし、VUCAの時代を迎え、予測困難な時代と呼ばれる現在、「未来はこうなる」という起こる未来のみを取り上げて授業を進めても、「未来で起こることが決まっているのであれば考える必要はない。」ということになり、積極的に未来を考えようとは思わず、子どもたちの主体的、意欲的な学習につながりにくいのではないだろうか。このような未来予測型授業の課題を乗り越えるために、筆者は、未来予測型授業を発展させ、「未来はこうありたい」という創造的に未来をとらえる未来洞察のアプローチを組み込んだ未来洞察型の授業構成を提案してきた。

VUCAの時代における未来のとらえ方として注目されているのが未来洞察のアプローチである。特に近年では、企業の経営立案や国の政策立案の場面でも活用されており、今後も活用の場面が増えていくものと思われる。澁谷（2020）は、イギリスのヒックスが提案する未来型思考に依拠し、未来予測・未来洞察の2つの未来へのアプローチ方法を位置づけた授業構成を提案してきた（表1）。

表1 未来洞察型の授業構成

過程	場面	内容
社会認識を深める過程	①問題発見	社会事象との出会い。社会問題を発見、その要因を把握し、予想や仮説を立てる。
	②探究	社会問題について、観察や調査等を行う。知識や概念を獲得する。
	③解決	社会問題に対する解決策のまとめを行い、新たな問いを発見する。
未来思考	④未来予測	現在の社会の様子や社会問題から予測可能な起こる未来を予測し、その影響を考える。
	⑤未来洞察	予測される未来とは異なる「こうありたい」という未来のアイデアを発想する。
	⑥価値判断 意思決定	複数出された未来のアイデアを検討した上で、望ましい未来のアイデアを決定し、その未来のアイデアが実現した時の社会の様子をシナリオ化する。

(澁谷 2020 に加筆)

表1のように、未来洞察型の授業単元は、2つの過程で構成される。1つ目は、現在に対する社会認識を深める過程である。社会問題を発見、把握した上で、観察や調査等で検証し、知識や概念を獲得していく。2つ目は未来思考の過程である。現在の社会の様子から予測可能な起こる未来を予測し、その影響を考えた後、梶川ほか(2019)が述べているように「不確実性が高く、実現した時のインパクトが高い」未来を創造し、そのシナリオを描く。このような授業実践の結果、自分たちの未来は予測できる起こる未来だけではなく、不確実ではあるが「こうありたい」という創造的な未来もあるという未来に対する認識の変化が見られ、未来洞察型の授業を進めることで、子どもたちの主体的、意欲的な学びを引き出し、未来をデザインする力を育成できるという成果を得ることができた。

第3学年以降の社会科においては、表1のような2つの未来へのアプローチを位置づけた授業構成で未来をデザインする力を育成していくことが可能である。しかし「具体的な活動を通して、関わる対象への^き_づ^きが生まれること」(文部科学省 2018)を重視する生活科においては、「学習の場や対象を広げるのではなく、一つ一つにじっくりと関わったり、繰り返し関わったりすることのできる学習活動が大切」(文部科学省 2018)であると示されていることから、すべての単元で2つの未来へのアプローチを扱うことは、子どもたちにとって負担となるだろう。しかし一方、第3学年以降の社会科における未来洞察型の授業への接続を考えるならば、どちらか一方の未来へのアプローチを組み込んだ授業に十分慣れさせた段階で、例えば、第2学年後半の単元では、2つの未来へのアプローチを含んだ授業構成も考える必要があるだろう。

従って、生活科において未来をデザインする力を育成する授業構成を考える際には、単元の性質に合わせて、未来予測する場面もしくは未来洞察する場面のどちらか一方を組み込んだ授業構成にしたり、2つの未来へのアプローチを組み込んだ授業構成にしたりする工夫が必要となる。

2. 未来をとらえる空間と時間のスケール

ここでは、生活科における未来をデザインする授業を設計するために、取り扱う空間と時間のスケールを考えていく。

1) 空間のスケール

生活科は、2学年を見通して3つの目標が設定されている(文部科学省 2018)。

(1) 学校、家庭および地域の生活に関わることを通して、自分と身近な人々、社会及び自然との関わりについて考えることができ、それらのよさやすばらしさ、自分との関わりに^き_づ^き、地域に愛着をもち自然を大切にしたり、集団や社会の一員として安全で適切な行動をしたりするようにする。(傍点：筆者)

(2) 身近な人々、社会及び自然と触れ合ったり関わったりすることを通して、それらを工夫したり楽しんだりする

ことができ、活動のよさや大切さに気付き、自分たちの遊びや生活をよりよくするようにする。(傍点：筆者)

(3) 自分自身を見つめることを通して、自分の生活や成長、身近な人々の支えについて考えることができ、自分のよさや可能性に気づき、意欲と自信をもって生活するようにする。(傍点：筆者)

朝倉(2017)は、生活科の特徴は「集団における自分の存在に気づくこと、自分のよさや得意にしていること、興味・関心をもってすることに気づくこと、自分の成長に気づくこと」という「自分自身についての気づきを大切にしている」ことであると述べている。また、前田(2017)は、自分との関わりに気づくことにより「地域に対する愛着や自然を大切に継続的な態度が形成されるとともに、集団や社会の一員として適切な行動を取る姿勢が形成されるようになる」と指摘している。従って、生活科で取り上げる空間は「自分との関わり」ということになり、第3学年以降の社会科で学習する「身近な地域や市町村」「都道府県」「国や世界」へ接続し、学習する空間の範囲が広がっていく。

2) 時間のスケール

空間の広がりに合わせて、学習する時間のスケールも広がっていく。澁谷(2018)は、社会科の授業を事例に、未来に焦点をあてて、Hicks(2002)のタイムライン、吉野(2009)の時空間スケールの概念、Braudel(2009)の時間の三層構造の論理の研究に依拠して、未来を考える際の時間のスケールを3つに整理した(表2)。Braudel(2009)が「これら三層の時間が一つの全体を構成している」と述べているように、個々の時間を単独で取り上げて授業を構成するのではなく、学年に応じて一つの学習単元で複数の時間スケールを関連させながら学習を進めることで、それぞれの時間スケールで生じることに違いがあることに気づき、事象の広がりをより明確にする授業を展開することができた(澁谷2020)。

表2 未来をとらえる時間スケールと学習の場面例(第5学年社会科「これからの食料生産」)

	時間スケール	授業での設定時間	とらえる変化の要因	学習(日本の食料生産に関する未来予測)の場面
未来	短期的	数日から1年まで	日常生活の変化	日本の食料生産に関して、これから1年の間にどのようなことが起こるだろうか。 ・地域における突然の集中豪雨や鳥インフルエンザなどの病気が流行り、生産が減少する。
	中期的	10年から20年先	社会・経済・政治・科学技術の変化	現在の農業や水産業がおかれている状況から、日本の食料生産はどのように変化していくだろうか。 ・農家や漁師の高齢化、海外からの輸入食品が増えることで、日本の食料自給率のさらなる低下が考えられる。
	長期的	20年から先	地形・気候・人々の生活の変化	人々の生活習慣の変化を踏まえると、これからの食生活はどのように変化していくだろうか。 ・過去50年の間で、食生活が小麦や肉中心に変化し、米の消費量の減少していることから、和食がなくなり、洋食が大部分をしめる。

(澁谷2020に加筆)

第3学年以降の社会科では、一つの学習単元で複数の時間スケールを関連させることで、社会における事象の広がりをよりとらえることができるが、先述したように、生活科では「一つ一つにじっくり関わる」授業構成にすると示されていることから、未来を考えることを組み込んだ授業構成にする場合、単元の性質に合わせて、1つの時

間スケールに絞った授業構成にする工夫が必要となる。一方、第3学年以降の社会科への学習への接続を意識すると、教材の配当学年、内容に応じて、複数の時間スケールを組み込んだ授業構成も考える必要があるだろう。

Ⅲ. 授業設計の視点

ここでは、生活科における未来をデザインする力の育成をめざす授業構成の視点について検討する。

1つ目は、未来へのアプローチ方法である。未来へのアプローチは、未来予測と未来洞察の2つの方法があるが、生活科においては単元の性質に合わせて、直線的に未来予測する場面もしくは仮説的に未来洞察する場面のどちらかを組み込むか、2つの未来へのアプローチに十分に慣れた段階では、その両方を組み込むかを選択して授業を構成することである。現在の心理学の研究において「子どもが未来を想像する際の鮮明さと豊かさは向上し続ける」(Atance 2021)との報告があることから、直線的な未来予測だけでなく、「こうありたい」と考える未来洞察の場面も積極的に取り扱い、創造的に未来をデザインする力を育成していく。例えば、澁谷(2020)で検証した、その未来でどのように自分が生活しているのかというシナリオ(生活科の特質をふまえ、本稿では日記という形で提案)を書き、未来の自分を可視化させることも考えられる。

2つ目は、取り扱う空間と時間のスケールである。生活科では具体的な活動を通して、「対象と自分自身の関わりへの気づきを大切にする」を重視し、「一つ一つにじっくりと関わったり、繰り返し関わったりする」学習を大切にしているため、「自分との関わり」という空間のスケールで、未来をとらえる際には、日常の変化をとらえる短期的な時間スケールを組み込んだ授業を構成することである。しかし一方、第3学年以降の社会科の空間や時間のスケールの広がりとの接続を考えると、教材の配当学年、内容に応じて、複数の時間スケールを組み込んだ授業構成も考える必要がある。

以上、論じてきたことをもとに、生活科の9つの内容を整理すると表3ようになる。次章以降、内容(9)「自分の成長」単元に関して、具体的に授業を構成する。

Ⅳ. 第2学年単元「未来の自分日記を書こう」を例に

1. 学習対象の検討

ここでは、第2学年単元「未来の自分日記を書こう」を例に、教科書の内容構成、先行実践を検討し、未来思考を組み込んだ単元計画を提案する。

平成29年告示小学校学習指導要領解説(生活編)において、自分の成長を考える学習は、9つある内容構成の最後に位置づけられており、「自分自身の生活や成長を振り返る活動を通して、自分の成長を具体的に実感し、これからの成長への願いをもって、意欲的に生活できるようにすることをめざす。」(文部科学省2018)と示されている。教科書の内容構成を見ても、まず、小学校の2年間でどんなことができるようになったのかという自分の成長を振り返った後、小学校入学前までの自分の成長を支えてくれた人へのインタビュー等を通して、自分の成長は多くの人の支えがあったことに気づき、最後に学習したことをまとめたり、3年生への目標を設定したりした上で、感謝の気持ちを伝える内容になっている。このような学習の特質は、これまでの自分自身の成長を支えてくれた人々の存在について考え、その上で自分自身が大きくなったこと、できるようになったこと、役割が増えたことに気づくことを通して、これまでの生活や成長を支えてくれた人々に感謝し、3年生に向けての生活に対する意欲の向上をめざす点にある。一方、次のような課題も指摘できる。未来をデザインするという視点で見ると、短期的な時間のスケールが設定され、未来へのアプローチ方法が「こうなるべき」という目標をベースにした未来予測型にとどまっており、子どもたちの未来をデザインする力のさらなる育成を考えると、中期的な時間のスケールも

表3 未来思考を組み込んだ生活科の内容構成例

内容	未来へのアプローチ方法	時間スケール	未来をとらえる発問例
(1)学校と生活	未来予測	短期的	・つうがくろでこまったことがあったとき、どのようにかいつすればいいのか。
(2)家庭と生活	未来予測	短期的	・いえでこれからどのようなことが、つづけられるかな。
(3)地域と生活	未来予測 or 未来洞察	短期的	・つぎのきせつは、どのようなおかしをつくっているかな。 ・まちのおまつりにこんなことがあったらいいな。
(4)公共物や公共施設の利用	未来洞察	短期的 中期的	・このまちにこんなしせつがあったらいいな。そのしせつでこんなぎょうじがあると、みんなのしいよ。
(5)季節の変化と生活	未来予測	短期的	・なつのきせつの木は、あきやふゆになるとどうなるかな。 ・みんなのくらはしは、なつからあきになるとどうなるかな。
(6)自然や物を使った遊び	未来予測	短期的	・つくったうごくおもちゃのざいりょうをかえると、どうなるかな。 ・こんなくふうをかんがえたよ。
(7)動植物の飼育・栽培	未来予測	短期的	・もし、あさがおのみずやりをしなかったら、どうなるかな。 ・〇〇をかいつづけるためには、どんなくふうがひつようかな。
(8)生活や出来事の伝え合い	未来予測	短期的	・あたらしい1ねんせいをしょうたいしよう。どのようなことをすればよろこんでくれるかな。
(9)自分の成長	未来予測 and 未来洞察	短期的 中期的	・どんなことができる3年生になっているかな。 ・こんな大人になりたいなをそうぞうしてみよう。

設定し、「こうありたい」という創造をベースにした未来洞察型も加え単元構想を考える必要がある。このような課題を乗り越えるために、将来の自分について考える活動を設定する中で、複数の時間スケールを取り入れた授業実践がある。

菅沼（2019）は、「自分の成長単元」の取り扱いについて、小学校現場の現状を分析し、多様な家庭環境に配慮した上で、単元「じぶんさがしのたびに しゅっぱつだ」の計画を行い、子どもたちへの効果を検証している。全9時間の単元構成となっており、7時間目から9時間目を未来の自分を考える場面として設定している。7時間目は、どんなことができるようになっていくのかを調べるために、3年生へのインタビューを行っている。8時間目は「大きくなったらなにになる」ということで、3年生の自分（短期的）がどのようにになっているのかとめた上で、将来（中期的）何になりたいかを考える学習になっている。菅沼（2019）は「未来というと、すぐに将来の夢に飛びがちであるが、生活科の流れの必然性を大事にした。」と述べている。この主張は、筆者が述べる「複数の時間スケールを組み込んだ授業構成も考える必要がある」という論と合致する。

9時間目は、8時間目の学びを受けて「何を頑張れば夢に近づけるのか」という課題を設定し、考えさせている。例えば、「パティシエになりたい」子は、「料理や片づけがじょうずでないといけないから、お手伝いをしていく。」ということを書いている。しかし、未来へのアプローチ方法が、パティシエになるには「お手伝いをする」というような「こうなっている（べき）」という目標ベースの未来予測型にとどまっており、未来洞察の場面が組み込まれていないところに課題が残る。「こうありたい」という創造的な未来をデザインする力の育成を考えるならば、「パティシエになった自分の店はどんな店なのか」「パティシエになった自分はどんなものを作っているのか」「それを買っていく人たちはどんな様子なのか」など、その未来で、自分がどのように活躍しているのか、どのような生

活をしているのかというシナリオを描くことで、自分の未来に希望が持てるのではないだろうか。

以上のような、内容(9)「自分の成長」単元の特質と課題をふまえ、本稿では、複数の時間スケールと未来洞察の場面でシナリオ作成を組み込み、「未来はこうありたい」という創造的な考え方で未来をデザインする授業を位置づけた単元モデルを提案する。

2. 第2学年「未来の自分日記を書こう」の単元モデル

1) 単元の目標

- ・自分自身の生活や成長を振り返る活動を通して、自分のことや支えてくれた人々について考え、自分が大きくなったこと、できるようになったこと、役割が増えたことに気づく。
- ・未来の自分がいきいき生活している姿を創造し、その様子を「未来の自分日記」の形で表現し、発表する中で、希望の未来への期待を持つことができる。
- ・これまで支えてくれた人々への感謝の気持ちを持ち、3年生に向けての目標と自分の未来に自信を持って意欲的に生活しようとする。

2) 単元の概要

これまでの論をもとに開発した「未来の自分日記を書こう」の単元計画を作成した(表4)。

単元の前半にあたる自分の成長を振り返る場面では、これまでの自分を調べる活動を設定した。小学校に入ってから自分の成長を振り返った後、これまで自分のことを支えてくれた人々について考え、その人たちにインタビューする活動を設定する。この場面の最後には、自分の成長を聞いてもらうことで、自分の成長の実感と、自分の成長を支えてくれた人々に感謝する気持ちを持つ内容とした。

単元の間部分では、3年生の自分を考える場面を設定した。数か月後(短期的時間スケール)にむかえる3年生では、こんなことができるようになっていくという目標ベースの未来予測をする内容とした。これまでの成長を振り返り、このまま成長を続けることで、できることがますます増えている自分に気づくことができ、3年生に向けての自信と期待につながるだろう。

単元の後半は、「ありたい未来」を描く未来洞察の場面を設定した。大人になったら(中期的時間スケール)こんな自分になっていたいということを創造的に考えさせ、それが実現し、未来の自分が活躍している様子や、幸福に生活している一日を創造的な日記として表現させる。その未来日記を発表する中で、自分たちの未来は希望に満ちていることに気づき、自分たちの未来に自信と期待を持ち、自己肯定感を高める場面としている。

先に出てきた「パティシエ」を例にすると、次のような未来を描く子どもを育成したい(表5)。

V. 成果と課題

本稿では、心理学の研究において「未来を想像する能力は3歳から5歳の間に重要な発達を遂げるが、この時期を超えても、子どもが未来を想像する際の鮮明さと豊かさは向上し続ける」という報告がされていることに依拠し、これまで筆者が提案してきた未来をデザインする力の育成をめざした社会科の授業研究の成果を発展させ、未来思考型の生活科の単元開発を試みた。本稿の成果は2点あげられる。

1点目は、筆者がこれまで取り組んできた社会科における未来洞察型の授業研究を整理し、未来へのアプローチ方法と時間スケールを視点に、未来思考を組み込んだ生活科の内容構成例を提案できたことである。未来へのアプローチは、未来予測と未来洞察の2つの方法があるが、生活科においては単元の性質に合わせて、直線的に未来予測する場面もしくは仮説的に未来洞察する場面のどちらかを組み込むか、2つの未来へのアプローチに十分に慣れ

表4 第2学年「未来の自分日記を書こう」の単元計画（全9時間）

場面	時	主発問	活動・内容
自分の成長の振り返り	1	小学校に入ってから、どんなことができるようになったかな。	「大きくなった自分をふりかえろう」 小学校に入学してから2年間でできるようになったことを考え、自分の成長に気づく。
	2	むかしの自分をしている人を考え、どんな自分だったのかきいてみよう。	「大きくなった自分のことをきいてみよう」 自分の成長をよく知っている人にインタビューしたり、今でも大切にとってあるものを探したりする。
	3		
	4	自分のせい長を、みんなにしょうかいしよう。	「みんな聞いて！わたしのせい長」 調べてわかった自分の成長を発表し、友だちから感想をもらうことで、自分の成長の実感と、支えてくれた人々に感謝の気持ちを持つ。
未来予測	5	3年生でもくひょう、「こんなことができるようになっていよう」をつたえよう。	「こんな3年生になっているよ」 これまでの成長を振り返り、このまま成長を続けることで、できることがますます増えることに気づき、さらなる自分の成長に期待する。
	6		
未来洞察	7	こんな大人になりたいなをかんがえよう。	「大きくなったらこんな自分になりたいな」 「こうありたい」という未来の自分の姿を創造する。
	8	大きくなった自分がかつやくしている1日を日記にしてみよう。	「未来の自分日記を書こう」 未来の自分が活躍している様子や、どんな生活を送っているのか創造的な日記を書く。
	9	大きくなった自分がかつやくしている1日を発表にしよう。	「未来の自分日記」発表会 未来で活躍している自分や、幸福に生活している自分の姿を発表する中で、自分たちの未来は希望に満ちていることに気づき、自己肯定感を高める。

表5 「未来の自分日記」記述例

<p>20〇〇年〇月〇日</p> <p>わたしは、ゆうめいなパティシエ〇〇です。わたしが作るいちごたっぷりミルクケーキは、このみせで一ばん売れているケーキです。</p> <p>このケーキをかうためにたくさんのおきやくさんがきます。きょうも、子どもをつれたお母さんがケーキをかいにきました。いつもおいしいケーキをありがとうと言ってくれてうれしいです。</p> <p>パティシエになるために、小さいころから、お母さんといっしょに、よくおかし作りをしていました。</p> <p>つぎは、チョコレートをいっぱい使ったケーキをつくってみようかなと思っています。パティシエのしごとはたのしいです。</p>
--

た段階では、その両方を組み込むかを選択して授業を構成することである。「子どもが未来を想像する際の鮮明さと豊かさは向上し続ける」(Atance 2021)との報告があることから、直線的な未来予測だけでなく、「こうありたい」と考える未来洞察の場面も積極的に取り扱い、その未来でどのように自分が生活しているのかというシナリオ(本稿では未来日記とした)を書き、未来の自分を可視化させることが必要である。

取り扱う空間と時間のスケールについては、生活科では具体的な活動を通して、「対象と自分自身の関わりの気づきを大切にする」を重視し、「一つ一つにじっくりと関わったり、繰り返し関わったりする」学習を大切にしているため、「自分との関わり」という空間のスケールで、未来をとらえる際には、日常の変化をとらえる短期的な時間スケールを組み込んだ授業を構成することが必要である。しかし一方、第3学年以降の社会科の空間や時間のスケールの広がりとの接続を考えると、教材の配当学年、内容に応じて、複数の時間スケールを組み込んだ授業構

成も考える必要があろうという立場に立ち、その単元構成を示した。

2点目は、未来思考を組み込んだ内容構成をもとにして、第2学年「未来の自分日記を書こう」を例に、具体的な単元モデルを示したことである。「こうありたい」という創造的な考え方で未来をデザインする未来洞察の考え方にもとづき、学習の最後に「未来の自分日記」を書く場面を設定した。こんな自分になっていたいということ創造的に考えさせ、それが実現し、未来の自分が活躍している様子や、幸福に生活している一日を創造的な日記として表現し、発表することを通して、自分たちの未来は希望に満ちていることに気づき、未来に自信と期待を持つことで、自己肯定感を高める単元計画を提案できたのではないかと考える。

今後の課題として、開発した単元モデルの有効性を、実践を通して検証する必要がある。

付記

本稿に関して開示すべき利益相反関連事項はない。なお、本研究は JSPS 科研費 JP22k13716 の助成を受けた研究成果の一部である。

文献 (References)

- 1) 朝倉淳「生活科の理念を示す教科目標」『小学校新学習指導要領の展開生活科編』明治図書 2017年 pp.18-23.
- 2) 岩田一彦『社会科固有の授業理論 30 の提言』明治図書 2001年.
- 3) 梶川文博、根本かおり、鷺田祐一「政策立案の新機軸としての「未来年表」活用」『一橋ビジネスレビュー』67巻 2019年 pp.88-99.
- 4) 西條辰義「フューチャー・デザインのこれから」『学術の動向』2021年 pp.65-66.
- 5) 澁谷友和「時間のマルチ・スケールアプローチによる未来予測型小学校社会科授業の開発－第6学年「私たちのくらしと税の役割」を事例にして－」『社会系教科教育学研究』第30号 2018年 pp.107-116.
- 6) 澁谷友和「小学校社会科未来洞察型授業の開発－希望の未来像を描くシナリオ作成に着目して－」『社会系教科教育学研究』第32号 2020年 pp.41-50.
- 7) 澁谷友和「小学校における未来を創造する力を育む「未来探究学習プログラム」の開発－小学校第3学年小単元「店ではらく人びとのしごと」を例に－」『奈良学園大学研究紀要』第14集 2021年 pp.79-89.
- 8) 菅沼敬介「生活科において多様な家庭環境に配慮した「成長単元」の取り扱いに関する研究－小学校2年生「じぶんさがしのたびに 出ばっだ」の実践を通して－」『福岡教育大学紀要』第68号 第4分冊 2019年 pp.187-195.
- 9) 田村学、奈須正裕、吉田豊香ほか『どきどき わくわく あたらしいせいかつ上』東京書籍 2020年.
- 10) 田村学、奈須正裕、吉田豊香ほか『あしたへ ジャンプ 新しい生活下』東京書籍 2020年.
- 11) 前田一男「教科としての体系性を再構築した学年の目標」『小学校新学習指導要領の展開生活科編』明治図書 2017年 pp.24-29.
- 12) 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）』文部科学省 2018年.
- 13) 文部科学省『小学校学習指導要領解説生活科編』東洋館出版社 2018年.
- 14) 吉野正敏「気候・気象が自然資源に与える影響」『文部科学省・学術審議会資源調査分科会編 新時代の自然資源論－統合管理の方法論－』クバプロ 2009年 pp.85-103.
- 15) 吉元輝幸「小学校社会科における社会的判断力の育成－社会機能の批判的考察を手がかりとして－」『社会科研究』第68号 2008年 pp.51-60.

- 16) Cristina M. Atance 「幼児における未来思考 どのように測定し、最適化できるか」『未来思考の心理学 予測・計画・達成する心のメカニズム』北大路書房 2021年 pp.80-100.
- 17) David Hicks. *Lessons for the future – The missing dimension in education–*. Trafford Publishing. 2002.
- 18) Fernand Braudel 著、金塚貞文訳『歴史入門』中央公論社 2009年.